

りでなく、極めて眞面目な人物であると云ふので、司令官の信任は頗る厚かつた。前年の暮少將が此處へ轉任する事になると、無理に人事局へ頼んで自分の參謀としたのを見ても其邊の消息は判る。

其上少將には多美呼と呼ぶ令嬢が居る。目下女子大學へ通つて居るが、少將は此嬢に對しては眼が無い位である。で、彼女の卒業を待つて眞壁を其婿にしようと思ふ考へを持って居る。それで令嬢は此夏休暇を鎮海で暮らす様に、両親から呼び迎へられて來る事となつた。かうなると彼はもう擬乎して居られなくなつた。素知らぬ顔で女中を解備するのが最も上策だと考へた。彼は女の郷里迄の旅費を與へて追歸さうとした。併し女の方ではさう易々と彼の云ふ通りにはならなかつた。彼女は鎮海の土地を去る前に死んで了つた。死んで二人の關係を明かにし眞壁が多美子と結婚する事が出來ない様にしたのである。

二

十一月の中旬であつた。第二艦隊を侵入軍とし、鎮海要港部を防禦軍として、兩者の聯合大演習が行はれる事となつた。其時臨時に一箇中隊の飛行機が、防禦軍に附屬する事となつて大村航空隊から出張させられた。其中隊長は眞壁大尉であつた。彼は囑望されて鎮海要港部參謀となつて來たが、未だ一年を経過しないのに、既に大村航空隊へ轉勤を命ぜられて居たのであつた。こ

れは大槻少將に疎んぜられ、其計らひでかうなつた事は明かであつた。

飛行機に乗つた彼は、其操縦の鮮かさ戰術の巧みさ、實に群を抜くものがあつた。僅かに一箇中隊を提げて侵入軍の大敵に當つたが、之れが爲侵入軍が惱まされた事は並大抵ではなかつた。斯くて演習も終局が近付いたので、明日こそは侵入軍が大舉して灣内に殺到するだらうと思はれる晩など、彼等は夜を徹して警戒任務に就いて居つた。明方になると彼は隊を纏めて歸港し、今日の對抗演習には一層勇敢に奮闘する意氣込みで、各機に發動機の試運転を行ふ事を命じ、自分は自分の機の發動機を調べに掛つた。所が彼の發動機は爆音が全く不整になつて居るのに氣が付いた。早速彼は工廠へ行つて修理を頼み込んだ。併し検査官や其道の技師が見た所では、到底修理の見込みは立たなかつた。かうなると此機は飛行を止めるより外に方法は無かつた。彼は中隊の編制を改めて、彼の機と他の機の乗員一組は陸上に残り、彼は空いた機に乗つて演習する事に決心し、其旨を司令官へ上申に行つた。

彼が海岸に歸つて來た時は、既に命令されてあつた出動時間が差迫つて居つた。と、彼は何と思つたか、急に中隊の編制を舊の通りに復し、自分は故障機へひらりと搭乗するなり、翼を伸した大鵬の様に、勇ましく空中の人となつて了つた。他の機も吾劣らじと滑走し始め、彼の後を追うて雁の様に連つて飛行した。處が、これは又どうした事の間違ひであつたか、眞壁機に乗る可き筈の偵察將校は一人海岸に残されて居た。機の操縦には大膽であるが、一面非常に細心な彼で

ある。どうしてこんな粗忽を仕出かしたか、又偵察將校にしても何故茫然と乗り後れたか、之れは大きな疑問であつた。併し演習は既に開始されて居る。そんな事を顧みて取調べようなどとする人は無く、どしどし進行して行くのであつた。

空中に於ける彼は恰も自分の手足を動かす様な自由さで隊を指揮し、千變萬化する巧妙な戦術によつて、敵機を外海遠く壓迫し、手も足も出ない様にして居つた。かうして戦闘は今や將に酣な時であつた。先頭に立つて敵機に迫つて居た彼の機から乳白色の煙團がパツと立ち上つた。と、續いて又第二回の煙塊が吐き出された。そして此時の煙の後には眞赤な焰が續いて居つた。あつと思ふ隙もなく、機體は猛火に包まれて火の玉となり、海中に向つて隕石の様に飛んで居た。他の機は墜落位置に廻つて飛び始める。附近に居た驅逐艦は急行したが、海面には何一つ残されて居るものもなく、静かな波は何事も起らなかつた様に敞つて居た。此凶報に接すると同時に、要港部からは掃海艇を急航せしめる事になつた。其時熱心な懇願に依り取残された偵察將校も此艇に同乗する事を許された。此搜索艇でも何等遺留物を見出す事が出来なかつたが、墜落位置とは大分離れた海面に於て、一つの板ぎれが浮んで居つたのを拾ひ上げて見た。處が之れに墨跡新しく次の様な字が記されて居た。

君の爲めに刑罰を選んだ罪を謝す

偵察將校××殿

眞壁

と、之れが明かに眞壁大尉の筆蹟であり、彼の死が覺悟の上での事であつたのも想像するに足るものであつた。併し、刑罰を選んだと云ふ文句の意味は誰しも一寸判らなかつた。後になつて漸く判つて見るとかうであつた。飛行機に乗り後れた偵察將校は、當然「後發航期」と云ふ罪名の下に、刑法によつて處罰される可きものであつた。彼自身は死を決して故障機に乗る事にしたが、何の罪もない偵察將校を死に導くには忍びなかつたらう。それで刑罰に陥れる事は判つて居乍ら、自分一人搭乘して飛んだに相違ないのである。

事實偵察將校は演習後軍法會議に廻された。彼は死した眞壁大尉に對して少しも惡意を持たなかつた。彼は航空隊に居つて飛行術を練習して居つた時眞壁教官の指導を受けたので、大尉の性格素行なんかは能く知つて居つた。否、大尉が女中を孕ませ延いては自殺に至らしめたと云ふ噂を信じなかつた程敬服して居つたのであつた。それで彼は法廷に立つても徹頭徹尾自分の怠慢から發航期に後れた事を主張した。其結果三ヶ月間獄中に投ぜられたと同時に、官職を免ぜられ位記返上までもさせられたのであつた。

眞壁大尉の葬儀は演習が終つて後、佐世保水交社に於て行はれた。一般部内では不徳漢と思つて居るには相違ないが、有鑿に同期生は彼の死を惜む情が切であつた。級友達はかう云つた。吾々は眞壁が生前一人の婦人を妊娠させ、且つ其女が自殺するに至つた程冷淡な行爲に出た事は否めない。併し今日から彼の罪は再び思ひ出さない事にしよう。若い時には誰しも一時的の迷も起

り、少し位の過失も有り勝である、併し其非を悟つて自殺する人に至つては甚だ稀である。然るに彼はそれを斷行した。彼であつたればこそかうした潔い自決をして呉れたのだ。之れで彼自身の罪は償はれた事になつた。夫と同時に吾々級友の面目も立つた譯である。それにしても、彼女が遺言に記した様に、彼女は死んで恨を晴した事になつたと云ふのは何かの因縁であつたらう。と、此意見に對して誰一人異議を唱へたものはなかつたのであつた。

三

これで事件一切は全く終を告げた様な事になつた。十二月の初め行はれた定期の大更迭には、大槻少將も現役を離れて閑散な身となり、東京の私邸へ落着いた。然るに其當時既に健康は酷く衰へて居て、兎角病床に親み勝であつた。三月も半ばになつた或日の事であつた。陽氣もそろそろ暖かくなつたので、珍らしい元氣で彼は日當りの好い縁側へ出て居つた。草花の芽が緑に萌え、小さな蝶々が紙片の様に翻つて居た。其處へ令嬢の多美子が紅茶を運んで来て一束の郵便物を残して行つた。茶を啜り乍ら彼は一々手紙を讀んで居た。其内急に異様な唸り聲を擧げ、ぱつたり後へ倒れて了つた。夫れから一層病は重くなつた。後で夫人は其等の手紙を調べて見たが、彼を驚かしたものは左に記すものより外には無いのであつた。

「參謀ツ。君の所の女中は僕が人から頼まれて周旋したんだが、あの女は少し怪しいねえ。此頃お腹が大きい様に思はれるが、男でも拵へて居るんじゃないかね」かう云つたのは鎮海要港部司令官大槻少將であつた。

「さうですかねえ。私は一向氣が付きませんでした。參謀眞壁大尉は氣の無い返事をした。「あん者を置いてると君が世間から誤解されるかも知れないよ。早く解傭して了ひ給へ」今度は少し興奮した様に云つた。

「代りさへ目付かれれば出してはもうムいませぬえ」眞壁は依然氣に留めない様な風であつた。併し、其後同じやうな事が司令官の口から二三度繰返された。眞壁は何とかしなくちやならなうと思ふには思ふが、忙がしい身なので直ぐ忘れるのが常であつた。其内夏も一入暑くなつて來た。大陸的の氣候で夜に入つても寢付かれない或夜、外氣に當る爲めに庭へ降り立つて、東から西へと往復運動を始めて居た。杜鵑が思ひ出した様に突然の叫びを落して過ぎた。晴れては居たが月の無い夜で、地上は褐色の暗黒が閉ぢて居た。彼が裏木戸の見える所へ歩いて行つた時、すうと忍び込んで來る人影を見出した。塀越しの隣は司令官の官舎になつてゐた。彼は嘗て司令官から云はれた女中の事に思ひが及んだ。事實を確める氣で植木の茂みに身を潜め乍ら近寄つた。人影は女中部屋の方への入口へ忍び寄つた。もう一足進んだら飛蒐つて遣らうと思つた刹那であつた。曲者の方でも氣が付いたか、鼠の様な早さで暗中へ消え込んで了つた。翌朝眞壁は女中を

解備して了つたのであつた。

半月も経つて後其女中が眞壁の官舎へ尋ねて来た。彼女は此處を出されてから料理屋の女中になつて居たのであつた。が、お腹が段々大きくなるので何時迄も勤めて居られなくなつた。一時郷里へ歸つてお産をして来たいと頼んでも、大槻少將は何かと云ひ紛らして旅費さへ出さうと云はないと云ふのである。女中の處へ忍んで来る男は大槻司令官であり彼女を孕ましたのも勿論彼である。而已ならず、今までも彼女の奉公先へ行つて依然關係は續けられて居ると云ふのであつた。眞壁は彼が守銭奴である事は能く知つて居つた。女中の身の上が氣の毒でもあり、且つ彼女を去らせる事は司令官の名譽の爲めにも好いと考へた。彼は自分で彼女に旅費を出して遣つた。併しそれが大きな間違ひを起さうとはどうして豫想する事が出来やう。

女中は眞壁大尉の親切を見るにつけ、大槻少將の不親切を恨まずには居られなかつた。生れて来る子供の前途も不安であり郷里へ歸るのも耻られた。彼女は遂に棧橋迄来て水中に身を投じたのであつた。又一方大槻少將の方では、眞壁が旅費迄與へて自分と女の間を割いたのだと邪推した。遂に深い嫉妬心さへも起つて来た。更に彼が苦しんだのは、自己の地位を失ふことであつた。眞壁が一度口に出したら、自分は職を失ふのは必然だと考へた。遂に眞壁の先手を打つ爲めに彼に罪を塗りつけて轉勤させたのであつた。

今日生き残つて司令官と女中との關係を詳細に語り得る者は、眞壁の家に雇はれて居た鮮人の

料理人である。

眞壁が大演習中臨時彼の麾下に屬した事は何と云ふ不幸な事であつたらう。殊に飛行機に故障が起つたのは、餘りに不幸すぎる眞壁大尉ではないか。彼が他の機に乗つて演習する事を上申に云つた時、朝食を攝る爲めに官舎へ歸つて居つた司令官の言はかうであつた。

「何發動機の爆音が不整だつて？ それ丈で故障と決定する譯には行かない。只夫れ丈けの事で其飛行機に乗るのを恐れるのかツ、若し之が實戦であつたら君はどうするんだ。死刑になることを免れないよ」

と、上官の言がかうであつた。此處でも鮮人の料理人が之れを聞いて居つた。眞壁大尉は死刑を宣告されたと同様であつた。それでも上官を恨んだらしい形跡は少しも残つて居ないのである。それのみか、司令官の不徳な行爲が自分の身になすりつけられて居ると知つて居るかどうか、只職業と命令とを重んじて、黙つて死んで行つた。

以上の事實は私が出獄後職を求め、傍、眞壁大尉の爲めに事件の真相を探らうとして鎮海へ渡つたが爲めに明瞭になつた。私はこれを世間に發表しようと思つて居る、二人を殺し一人を獄に投じた報ひとしては餘りに輕きに過ぎるけれども！

後期發航罪に問はれた××

大槻少將閣下

二 萬 圓

漆の色（しつ）の未だ新（あたら）しい、ナツシユの箱自動車（はこじどうしゃ）が音もなく滑る。主人（しゅじん）の黒須莊助（くろすけさけ）を乗せ、成増（なりぞう）の方（かた）へ街道（かど）を驀進（もっしん）して居るのである。

「おい鈴本（すずもと）。途（みち）が違（ちが）ふんぢやないかッ。中（なか）から呶鳴（どな）つた主人（しゅじん）である。黒須（くろす）の先代（せんだい）はつい此（この）春死（はるし）んだ。まだ書生（しせい）上りの若い莊助（さけ）は、我儘（わがまま）其物（そのもの）の様な氣分（きぶん）である。

途（みち）は確（た）かに違（ちが）つた方（かた）へ曲（まが）つたのである。車（くるま）は規定（きぎん）以上の速度（そくど）を出（だ）して居る。が、震動（しんどう）も無（な）ければ噪音（さうおん）もない。で、主人（しゅじん）の云（い）つた聲（こゑ）は、明（あ）かに運轉士（うんてんし）、鈴本（すずもと）に聞（き）えたのである。だのに、鈴本（すずもと）は一向（いっかう）知らんふりで把手（てしん）へしつかり嚙（か）り付（つ）いて居る。

「おい鈴本（すずもと）。……」又始（またはじ）まつた、ブルジョワの我儘息子（わがままむすこ）に通有（つういう）な、氣短（きみじ）かさの怒（いかり）が破裂（はれち）したのである。

「此方（こつち）が近道（ちかみち）です。素氣（そつげ）なく鈴本（すずもと）が云（い）ひ返（かへ）した。彼（かれ）が此主人（このしゅじん）に備（やと）はれてから、四ヶ月（しがついげふ）以上も經（た）つて居るが、こんな素氣（そつげ）ない云（い）ひ方（かた）をした事（こと）はない。抑（おさ）もこれが初（は）めてであつた。常（つね）には猫（ねこ）のやう

な温順（ぬくも）な彼（かれ）なのであつた。

「チエッ。」主人（しゅじん）は舌打（したうち）した。運轉士（うんてんし）の答（こた）へ方（かた）が氣（き）に食（く）はないのである。だけど別に何（なん）とも云（い）ひ出（だ）さなかつた。元々（もと）此邊（このへん）の地理（ちり）に就（つ）て、少（すこ）しも自信（じゆん）を持つて居（ゐ）ないからである。

秋（あき）も既（すで）う末（すえ）で、百舌鳥（ももぢ）の悲鳴（ひめい）が斜（な）に飛（と）んだ。主人（しゅじん）莊助（さけ）は、今（いま）兎月園（うづきえん）に行（い）つて戀人（こひびと）と逢（あ）はうと云（い）ふ所（ところ）なのである。此戀人（このこひびと）同士（どうし）は、年（ねん）内（ない）には正式（せいしき）に結婚（けっこん）する事（こと）になつて居るが、それまで逢（あ）はずに居（ゐ）られない仲（な）なのであつた。

先刻（さつぎ）運轉士（うんてんし）が、Y字路（じろ）を左（ひだり）へ曲（まが）つてから、道幅（みちばた）は急（いそ）に狭（せま）くなり、廣々（ひろく）とした刈田（かりた）の中（なか）へ敵（た）り込（こ）んで居る。其先（そのま）に、海（うみ）へ突出（ついで）した岬（さき）の様に、木立（こだち）がこんもり横（よこ）はつて居る。此森陰（このもりかげ）には、只（ただ）一軒（いっけん）のアトリエが、捨（す）てられたやうに建（た）つて居る。其處（そこ）には、今誰（いまたれ）も住（す）ひをして居（ゐ）ない。鈴本（すずもと）はそれをよく知（し）つて居た。

途（みち）は自然（しぜん）とアトリエへ來（く）る。自動車（じどうしゃ）は其前（そのまへ）まで來るとびつたり停（とま）つた。主人（しゅじん）は怒（おこ）り出すことよ

りも、先（ま）づ不思議（ふしぎ）さうに邊（あた）りをきよろ／＼見廻（みまわ）した。

「旦那（だんな）。お手間（てま）は取（と）らせません。一寸（いっそう）此處（このところ）へ降りて下さい。是非（ぜひ）貴下（あなた）に見（み）て戴（た）きたいものがあ

るんです。……なあに、兎月園（うづきえん）はもう此處（このところ）からだ五分（ごぶん）もかゝりやしませんよ。」鈴本（すずもと）は先に降（お）りて扉（し）を開（ひら）いた。

「何（なん）だい。勝手（かたて）な處（ところ）へ連れて來（き）やがつて、それで俺（おれ）に降（お）りろと云（い）ふのか。」主人（しゅじん）はクツシヨンの中（なか）

へ埋れ込んで膨れ返つて云ふのであつた。無理もない。  
 「だけどねえ。此處には素晴らしい金儲けが轉がつて居るんですよ。一寸ご覧になつたら直ぐ判ります。ご面倒でせうが、まあ降りて見て下さい。」運轉士は執拗く勧めた。  
 「面倒なことを云ひやがるなあ。」帯の間から黄色いものを引出して、一寸時間を見てから澁々と起つた。有繫に強慾であつた親爺の息子である。金儲けと聞かされて見ると、口で云ふ程面倒がつては居ないのである。

「此ぼろアトリエを只呉れるとでも云ふのかなッ。」

「家も家ですがねえ。まあ中へ這入つてご覧下さい。」

運轉士は先に立つて扉を開けた。鍵はちやんと借りて来て持つて居たのである。晝室の中は、空家らしい古びた臭ひと、何となくごみくしいのとで不快であつた。頭の上で、鋭い百舌鳥の一と叫びが裂れた。

主人が一步踏み込むなり、鈴木は後へ素早く廻つて、ピチンと扉の錠を卸ろした。否々、それよりももつと早かつたのは「えいッ。」と一聲氣合と共に、莊助の軀がぱつたり前へ、將棊の駒を倒したやう。「吁ッ」と驚いたのは寧ろ後からであつた。後ろへ廻つた鈴木が、腰の邊りをぽんと蹴つたのであつた。

「何をやる。」と其言葉も皆まで云はせなかつた。鈴木は腕は、ひ弱く瘦せた小男の咽喉へ絡んで

居た。莊助は両手でそれを掻き毟る様にし、藻掻き廻つたことは云ふまでもない。

此處等まで云つたらもうお判りです。運轉士鈴木と云つて来たのは、外でもない此私のことなんです。だが、假令こんなひよろな莊助であつたにしても、一人で男を一匹縛ると云ふことは、中々生やさしい仕事ではないものです。随分私は引掻かれた。左の腕へは喰ひ付かれもした。又其時の莊助の面相と来ると、逆も物凄くものであつた。命がけになつて反抗するんですからねえ。私は奮闘を続けながらも、こんな残酷な眞似は止めてしまはるか幾度思つたか判らなかつた。しかし、初めからやらなかつたんなら兎も角も、これまでやつてから止めるわけには行かなかつた。私は到頭莊助を組伏せて、豫め用意して居た麻繩を出し、手足をしつかり縛り揚げてしまつた。

「やい。此處こそ野中の一軒家と云ふやつだ。聲を立てたかつたらいくらでも立てろッ。」かう云ひながら莊助の顔をはつたと睨みつけた。餘りの突然である。其處に怪疑と恐怖と怨恨とが、こんがらかつて居たのは云ふまでもない。しかし、莊助は息苦しさに喘いで居る。大聲を出すには苦し過ぎたし、驚き過ぎたに相違ない。

私は用意の短刀を内隠しから引出した。鞘諸共にぐつと握つて、彼の鼻先へ黙つて突き出した。見る見るうちに莊助の顔から、艶が失はれて行つた事は云ふまでもない。

「鈴木ッ。お前は氣でも狂つたのか。主人に向つて何と云ふことだ。」彼は力一杯でこれだけ云つ

た。唇は痙攣した様に細かく慄へて居た。  
 「當り前よッ。氣だつて狂はうぢやないか。命まで投出してかゝつた戀しい女だ。それをむざむざと横取されりやあ、氣が狂はずに居られるかえ。それもさ、俺の方には只金、金が無いと云ふばツかりで、さうだ、金の爲めに神聖な戀を破られたんだ。其金が又、自分の汗で正當に得た金とでも云ふんなら兎も角、弱い貧しい人々から、没義道に絞り上げた親爺の金を、何の努力も費さないで譲り受けた貴様だ。そんな奴が、そんな汚れた金で、俺の戀を奪つて行つたぢやないか。それを黙つて引込んで見て居られるかッ。元々此戀の爲めに捨てる俺の命だ。さあ、かうなつたからには覺悟をしッ。」

いざかうなると言葉が詰つて、今迄思つて居た丈けのことが云はれなかつた。

「呬ッ。それぢややつぱり……」莊助は確かに驚いた。「お前は野々村集一郎だツたのかッ。」

「さうよッ。貴様が薄々感付て居りながら、死んだと云ふ噂に捉はれて、愚圖々々して居たのが身の破滅だ。誰を怨む事もないだらう。」私は短刀を左の手に持ち直して、右手を柄の上に掛けた。

彼は疑はしさうな眼を睜つて、私の舉動を見て居たが、急に眼を伏せて呟くやうに云つた。

「そんな事は、此方の知つたことぢやない。」  
 とは云つたが、聲は慄へて今にも泣き出しさうな様子であつた。

「知つた事ぢやない？ 好くもほざいたなあ。貴様が知らうが知るまいが、そんなことに遠慮はしやしない。貴様がナツシユの自動車を買ひ込んだと聞いた時、俺はすツかり決心したんだぞ。自動車學校の生徒に成り下り、おまけに貴様の知人を捜し歩いて、頭を下げて紹介を頼んだり、またおまけに、目差す戀の仇に傭はれて、心にもなくへい／＼とへえつくばつて來た。今までの苦心丈けでも考へて見ろッ。」

短刀の鞘を颯と拂つた。氷のやうな鋭い光から、露でもしたたりさうな凄いのを、じり／＼と莊助の眉間先へ、突き着けて行く私であつた。

「それでお前は、此俺をどうしようと云ふんだ」上體をじりじり後へ反らしながら、一層慄へる聲で云ふのであつた。

「どうするもかうするもあるもんか、好く見ろ。こりやなまくらや鹽鮭たあ違ふんだぞ。」眼先で二三度煌めかしながら云つた。「好く落着いて見て居るがい、今からちくり／＼と斬りさいなんで、斃殺にしてやるから。」

「お前は、お前は、高等教育まで受けて居ながら、人を騙してこんな所へ連れ込むなんて、あんまり、あんまりそれは卑怯ぢやないか。」

彼は少しく上氣したらしい。おろ／＼聲で云ふのであつた。

「口惜からうが、今となつては既う泣言を云ふな。人の戀人を横取するなんて、大外れたことを

やる貴様に似合ないぞ。餘りに度胸がなさ過ぎるぞ。」  
 云ひながら刀を一度手元へ引いて、  
 「やイツ。」と再び彼の眼先へ突出した。  
 「きヤッ。」と所謂絹を裂くと云ふ鋭い一聲。ぱつたり後ろへ倒れたと思ふと、「うゝん。」と苦し氣な呻りを揚げた。

刺身のやうに肉が裂けて、眞赤な血潮がだく／＼と、泉のやうに湧き出したと、云ふべき所であるがさうではなかつた。七首は其處まで深く突込まれたのではなかつたのである。

「しつかりしろ、一ト思ひに殺して了ひはしない。」

私は突と起ち上つて、彼の横面をぼんと蹴つた。彼は子供の様に「わアッ」と泣き出した。「何だッ。子供ぢやあるまいし、今更泣いたつて始まるもんか。起きろッ。」彼の襟首を掴んで、二三度小突き廻してから引き起した。

「命が惜いのか。えゝこらッ、黒須莊助は命が惜いと云ふのか。…命は惜いから、温順しく女を渡すと云ふのかッ。」

彼は泣きながら頭を振つた。

「女を渡すのはいやだと云ふのか。笑はせやがる。彼女だつて今頃は、貴様も同様に縛り上げられて、土藏の隅へ轉がされて居るんだ。貴様の命を片付けたら、行つて悠々と弄んでやるん

だ。今更あんな賣女に未練はないが、辱かしめる丈けは辱かしめ、追付貴様の件をさしてやる。安心して先に死ぬるがいゝ、判つたか、判つたらそろ／＼觀念して念佛の一つも唱へることにしろ。私は齒科醫が手術をする時の様に身構へをしてにじり寄つた。左の耳から斬落してやれッ。」

「ま、まッ、まッて、まつてくれッ。」

首を捻つて、左の耳を後ろへ廻した。彼の顔中は急速度の震動に慄へ出し、額から油汗がじりじりと滲み出した。

「何か云ひ残したいこともあるのか、私は身構へを崩さない。尤も冷靜な壯嚴な調子で、かう云つた。」

「勘辨して呉れ給へ、野々村君。ボ、僕が悪かつた。君と妙子とは戀仲であると云ふ事は、それや僕も薄々知つて居つた。それを…それを、彼は泣きじやくりになつて來た。」

「だけど、僕獨りが悪いんぢやない。妙子の方だつて、…そりや妙子の方にしては…。」

彼は涙にむせんで聲が出ない。怨を復する人にとつて、かうした状態を眼の前に見る程、それ程愉快な事は又となからう。此時私の殘忍性は、むく／＼と擡頭げてきた。縛り上げた者を斬る。と云ふのは、無生物を殺すのと同じ。これではあんまり興味が薄過ぎる。少し位は抵抗もし悲鳴を揚げて逃げ廻るのを、追掛々々ちびり／＼と、斬さいなんで行く所に興味がなくてはならない。



「今縛つてある綱を切つてやる。此部屋中を逃げ廻つたり、反抗したりする事を許してやらう。斃殺と云ふのはそれでなくちやいけない。」私はしばらくと綱を切つて了つてから云つた。

「さあ逃げ廻れツ、向つてこいッ。」私は勢鋭く斬込んだ。莊助は體を颯とかはした。其機會に起つて逃げ出さうとしたが、どうしたと云ふのか起き上り得なかつた。

「助けてくれッ。」大聲で叫んだ。

「うぬ。大きな聲を出しやがるなッ。」私は靴の儘で口の邊りを蹴上げたのであつた。

「の、野々村君、聲を立てないから命丈け助けて呉れ給へ。君の云ふ事なら何でも肯く。これ此通り拜むから……。」彼は腰を抜かして合掌して居つた。

「哀れつぽく出て来たなッ。そんな事でおいそれと承知が出来ると思ふか。」私は彼の背後へ廻つた。ぽん／＼と靴で腰を蹴つた。「逃げる／＼、部屋中一面血に染めてやる。」

「僕は、僕は、ヒヒヒイ、殺されるのはいやだッ。命丈けは助けてくれ給へ。妙子は君に渡すから。ネエ／＼、野々村君ッ、イ命丈けは助けてくツくれ……。」今度は相手が狂氣の様に叫び出した。

「女ならいつでも俺の自由になる。あんな、虚榮に富んだ女なんか欲しくもない。貴様逃げ出さうとしないのを見ると、観念の脚を固めたと見えるなッ。ようし。」

「マ、マア待つて、野々村君待つて呉れ給へ。僕が君達二人の生活を保證する。保證する。屹度保證する。彼は軀を跪きつゝ、船にでも乗つて居る様に慄へて居た。

「金さへ出せば何でも勝手になると思つて居るなッ。其ブルジョア根性に今思ひ知らしてやる。サア、起つてッ。男らしくしろッ。」私は胸倉を捉つて掴み揚げた。しかし爪足を延ばしたきりなので、起たせる事が出来なかつた。

「おう／＼／＼。」彼は今恐怖の頂上に達したらしい。「命丈けは助けて呉れッ。いくらでも金なら出す。いくらでも。」

彼は嘘言のやうに言ひ續けた。

「金を出すッ。本當に貴様に金が出せるか、命より金の方が大事だらうが。」

「出します／＼。いくらでも出します。」

「よッし。そんなら金を出して見る。小切手帖と萬年筆は此靴の中にある筈だし、印形は時計の鎖にぶら下つて居るぢやねえか。」

「書きます／＼。」彼は靴の中から小切手帖を引出した。三菱銀行と三井銀行と、二冊の帖が這入つて居た。「いくらと書きませう。」

「貴様の命なら高が知れてる。せい／＼一萬圓をするかなあ。」私は益々鹿爪らしい顔で云つた。案外安價な事を云ひ出すので、彼が呆氣に取られるだらうと想像しての上である。

少時私の顔を見守つて居た彼は、急に悦びの色を浮かべて小切手を書いた。  
 「それぢやこれを取つてくれ給へ。而して怒を解いて呉れ給へ。僕は君に感謝する。」彼は續けざまに、頭をぺこ／＼と下げた。

「馬鹿ッ。まだ命を助けてやるとは云やしない。」私は小切手を受取つて置いてから一喝した。此時莊助の驚き方と怨めし相な人相は、形容すべき言葉がないのであつた。が、一度小切手を書かせてそれを受取つたので、彼の心は少しづつ和やかになつて行くやうであつた。

「足りないやうでしたら書直します。」彼は既う媚びるやうな態度になつて來た。

「金高の事なんか云つてるんぢやない。貴様達二人の戀と云ふ奴は、元々欲得づくで出來て居るだけに、誠に淺薄極まるぢやないか。自分の命さへ助かつたら、女の方は取られても辱められても好いと云ふ氣なんだなッ。」

「そッ、さう云ふわけぢやないんですが、……。」彼は自分を耻づる様に苦笑した。

「そんなわけでなかつたらどんな譯だ。女は渡すのか渡さないのか。」

「そんなら今一枚書いて差上ります。」

「當り前よ。今度は三菱銀行の切手帖へ書くんぞ。」

「やつぱり一萬圓といたしますか。」顔を歪めて妙な笑ひ方をしながら訊いた。  
 私は今一枚一萬圓と云ふ小切手を受取つた。「こんな事でよかつたら、何もあんなに威かさなく

ツても、始めから、さう云つ呉れよばよかつたのに。」彼は大きく一ツ溜息を吐いた後、こんな横着な事を云ふのであつた。

「馬鹿ッ。早まるなッ。命を助けるとはまだ一言も言つてないぞ。第一俺に此小切手を渡して置いて後から脅迫されたなどと訴へ出る氣だらう。さうは問屋で卸さない。依然貴様を生かして置く譯には行かないぞッ。」私は意地悪くかう云つて短刀を持ち直した。

「いゝえ、決して、そんな事なんか云やしません。神かけて私は云やしません。綺麗さつぱり諦めて下さつたから、私の方では大變感謝をして居るんです。ほんとです。」  
 彼は又しても頭をびよこん／＼と下げ續けた。

「間違ひはないなあ。そんなら序にかうしろ。貴様は別に證文を書くんだ。一方の一萬圓は解備する時の手當金だとなあ。片ツ方の一萬圓は、自動車に瀕した時、身を以て命を救つて呉れたお禮金だとなあ。それさへ書いて置けば、俺の方から二度と無心になど行きやしない。判つたらう。」

勿論莊助は云ふ儘に證文も書いた。私はそれ等を掴むなり、自動車を飛ばして東京へ歸つて來た。其日銀行が閉店するまでに、金を引出さないと危険だからである。

黒須と妙子とはどうしたかとお尋ねですか。別段どうもかうもしやしません。其儘そこへつき

放したわけですよ。

私は本當に野々村集一郎かと云ふんですね。どういたしまして、私は鈴木爲藏など云ふのぢやないんですがね。これは少し譯があつて偽名を使ふ事にして居るんですが、さうかと云つて野々村なんて云ふんぢやありませんや。野々村さんと云ふ人は、戀人妙子さんを莊助に取られたので、郷里へ歸つて失戀自殺をしたと云ひますから、依然それは本當なんでせうよ。どこか大學を出たばかりの時だと云ふことです。

妙子と云ふ人の事ですか。その方は猶更何も知りやしませんや。主人の供をして逢曳の場所へは行つたんですが、一度だつて顔を見せた事はありませんや。

早い話がかういふ譯なんです。私は黒須家へ傭はれた只の運轉士ですよ。所が一日主人が訊くんです。「鈴木、お前の郷里はどこなのか」とねえ。私は出鱈目の事を云つたんですよ。すると主人が云ふんです。「其村なら野々村集一郎と云ふ男が居つた筈だ。知らないか」と云ふんです。勿論私は知らないと答いたんです。すると主人は野々村の事をすつかり喋つたんです。私と大變よく似て居るとも云つたんです。主人は野々村を一寸見掛けた事があるんださうですよ。何しろ自分が女房にしようかと云ふ女の先の情夫ですからねえ。やつぱり氣にかゝつて居たんでせう。それで似て居るやうに思つたのかも知れません。

所がですねえ、只それだけなら私は何も判らなかつたんですが、他の日に主人が酔つ拂つて、お惚氣交りに野々村の女を横取したことを話出したんです。其時もやはり私と野々村とが似て居ると云ふんです。で私はすつかり野々村になつて了つて、かうした芝居を打つ氣になつたんです。

なぜもつと多く金を取らなかつたかと、おつしやるんですか、そこは私も考へました。貧乏に生れた男が餘り澤山金を持つて、却て一生をしくじりますからねえ。此位の所が恰度よからうと思つたんです。其お蔭様でどうにかこんな商賣をやつて居る譯なんです。人は餘り慾張過ぎてもいけませんや。

これは或飲食店の主人の懺悔話なのです。

櫛

沖の鷹島へ渡る船が、水道の途中で涙石を見ると、浅瀬へ乗掛けるに極つて居る。其邊一面暗礁で、風も強いし浪も荒い。乗上げた船で助かつた例はない。しかも岩を見た者は病氣になるか、片輪になるか死んで了ふか、三つに一つの災厄は免れない。岩は北東端の申腹に立ち、平生は茂みの中に隠れて居るが、どうかすると風の具合で頂上に現はす。傳へ來つた話によると、何時でも涙を流した様に、濕氣が二條流れて居ると云ふ。

或年、それは残暑の強い時であつた。こんな邊鄙な村の棧橋へ發動汽船から上陸した一青年があつた。見事な旅行鞆を持つて來た丈けでも、開關以來の珍事であつたが、それよりも更に、其青年の雅やかな容貌は、土地の者の眼を驚かした。それは全く掃溜に降りた鶴なのであつた。顔色が餘り白過ぎるのと、すんなりと自然に瘦せた姿を見て、潮風に吹き鍊はれた漁師達は、病後の保養に來た都人だと相場を踏んだ。事實青年自身でも、そんな風に云つて居つたのであつた。人々は其丈の事が腑に落ちると、それ以上、此青年がどんな位置に居る人で、如何なる境遇に置

かれて居るか、誰も知らうと試みる者はなかつた。尤も此處に居る只一人の巡查だけは、職掌柄、其青年の名が柳原健男と云ふのであり、東京の富豪の息子であつて、藥學を研究する人である位は調べて居た。

突然こんな島へ來た所で、都の人を下宿させようと云ふ旅館も、素人家もあらう筈はなかつた。色々交渉をした擧句、島内に唯一つある寺で、如林寺と云ふのに宿を借りる事になつた。田舎の風景と云つた所で、いざ來て見ると單調極まるもので、都會に居て憧憬した程のものでは無い。誰もがそんな風に考へる様に、柳原青年にして見た所で、一ト渡り附近を歩いて見た後は、寺の中に引籠つて、外出しようとはしなくなつた。

彼の食事から身の圍り萬端は、寺の梵妻のお園さんが世話をした。土地には不似合な位立派な寺ではあるが、住職と梵妻の外、別に人手と云つてはないからである。お園は晝間は裏の島へ出て、寺の食扶持にする野菜を作つたり、果物を採つたりして働いて居た。時々這入つて來て青年の居間を覗いて見ると、彼は何時でも讀書三昧に耽つて居た。

「あなたは病氣の後だと云ふのに、そんなに毎日、朝から晩まで坐つてばかり居なさつては、保養にも何にもなりませんよ。こんな天氣の好い時なんか、少しは外へ出てご覽なさい。山なり海岸なりを歩いて見ると、氣が換つて好いもんですよ。」

と、息子にでも云つて訊かせる様に、梵妻はよくこんなことを云ひくした。青年は一寸振向

いて、にや／＼と微笑を漏らしながら、如何にも可愛い顔で云ふのであつた。「此邊は空気が好いもんですから、只かうして居る丈けでも、十分保養になりますよ。」と、中々云ふことを背かうとしないのであつた。

一日々々と暑さは衰へて、爽かさが朝晩に訪づれて来るやうになつて行つた。季節の移り變りには、人の心もいつしか動いた。青年も讀書の疲れを醫する爲、或夜縁先へ出て牙え渡つた月影を眺めて居た。月は又一入旅情を唆るものである。彼は不意と思ひ出して、旅行鞆の中から取出したのは、彼の愛する一管の笛であつた。彼は靜かにそれを口に當てると、遠慮深く小さな音を吹き起し始めた。峰まで抱き込んで居る廣庭に、池の水はちよろ／＼とせ／＼らいで居た。木の葉はさら／＼と風に戦いて居た。其等の優しい天籟に織り交つて、彼の吹き鳴らす笛の音は、世にも妙なる音楽であつた。住職は腸を絞られる様だと感心した。其妻は涙を零して詠嘆の辭を繰返した。それよりも、青年自身すら既に身も世もあらぬ恍惚境をさ迷つて居た。これから笛は夕方の日課となつてしまつた。

「寺に来て居るお客さんの笛を聞いた事があるか。眞に人間業とは思はれないぜえ。人や馬なんかばかりぢやない。草木までしいんとなつて聞惚れて居るぞ。」と、こんな噂が口から耳へ、耳から口へと擴がつて行つた。變化に乏しい田舎のことである。この位の事でも大事件の一つに相違ないのであつた。

娘の在る家へ夜遊びに行くこと。これが唯一の樂みであつた島の青年達も、急に音楽と云ふものにも目覺めて來た。燃えて止まない彼等の若い唇で竹に觸れないものはなくなつた。それよりも更に一層動かされたのは、小鳥の様な若い娘達であつた。恰も花の香に誘はれて行く胡蝶のやうに、彼女達は夜々妙音の源を尋ねて、お寺の廣場へと石段を登つて行つた。憚りを知らぬ娘達は、庫裡の爐端では我慢出來なくなつた。段々と青年の隣室へ躍り寄つた。或者は襖の間に隙を拵へて、偷見を始めるものもあつた。

遺瀨ない戀心を抱いた乙女になると、後姿を隙見する丈けでは、到底満足が出来なかつた。庭の岩蔭や叢の中へ忍び隠れて、心行くまで秀麗な青年の俤に陶醉しようと試みた。こんな事を企てる娘になると、濱で取れたものや畠に産したものを持つて來て、お園の御意を迎へる事を怠つてはならなかつた。お園もかうした贈物の顔を見ると、この位の取持を厭ひはしなかつた。むしろたやすい便宜を與へる事によつて、贈物を得られる事を悦んだ。

だが、青春の血が胸に躍る乙女達は、次第に狂はしくなつて行つた。僅かに俤を見る丈けで、何時迄も満足は續かなかつた。殊に露骨な戀の表現に慣された里の娘である。いつしか慎みは忘れられ、地金を現はす様になつて來た。彼女達は、戀ひ慕つて居る男の隣室へ集まつて來て居ながら、卑猥な俗語を口誦んだり、聞くに堪へない戀話に、無遠慮な高笑ひをするやうになつた。これは構つて呉れない青年の注意を惹く爲めであらうが、半分自棄になつた浮氣女が、群集

心理に支配されたにもよるのであらう。

「柳原さん。ちつとは此方へ出て来ませんか。お菊さんが貴下に焦れ死しさうだと云つてますよ。」一人がこんな事を云ひ出した。

「あれッ。お花さんそりやあんまりだわ。自分がさうだから人の事にかこつたりして！」と、これは名を擧げられたお菊と云ふの、怨み言であらう。

「なあに、皆で他人の事の様に云つても駄目よ。此處に来て居る者で、柳原さんに惚れて居ない者は一人も居やしないぢやないか。ハッハッハ……。」と、男の様な笑ひ方をする、年を食つて居るらしい女も居た。

こんな不躰な云ひ草も、里人達には何の不思議もない事かも知れない。が、都でお坊ちゃん育ちの青年である。若い女と話をした事のない健男である。神聖其物の様に思つて居る女の口から、こんな猥らな言葉を聞かされると、聞く身の方で耻かしく、自分の心を汚された様な氣がする。かうした晩が幾度か續くと、青年はもう堪へられなくなつた。好きな笛を吹くのもびつたりやめた。元の通り讀書三昧に立ち戻つた。しかしこれによつて救はれる事は出来なかつた。娘達は笛を聞かんが爲めに集つて来るのではないのであつた。彼が笛を吹くことを止めたからと云つて、隣室へ慕ひ寄る日課を止めはしなかつた。猥らな聲は依然隣室から彼に呼掛けた。笛の音が無い丈けに、それを打消す術がないのであつた。

そればかりではない。一度吹き始めた笛である。これを止めて了ふと、淋しい秋の旅情を慰めるのに、青年自身の方で困つて了つた。到頭彼は日が暮れるのを待つて、人目を避けながら寺を抜け出した。一管の笛が、同伴として彼の手に握られて居る事は云ふまでもない。こんな事と知らない娘達が、夕餉の後を片付けるなり、いそぐと寺へ集つて来て見ると、人の好い住職がにこ／＼しながら、お園のお酌で満足し切つた様に、ちびり／＼と杯を舐めて居るのを見せられた丈けであつた。娘達は忌々しさを噛み殺して、淋しい心をてん／＼に我家へ運んだ。其次の晩にも戀人は依然蕩抜の殻であつた。

「柳原さんどうなさつたの。」到頭思ひ切つて訊いた者があつた。

「さあ。どこか其邊を散歩でもして居られるんでせう。」お園の答へには白ばつくりて居る様子があつた。

「あんまり皆で追廻すもんだから、到頭東京へ逃げて歸りなすつた様子だ。」住職が笑ひ乍ら云つた。

「和尚さんは嘘よ、嘘ばかり云つてるわ。」

「そんなら家中捜して見るがい。」住職は面白そうに嘯いた。

中にはそつと立つて行つて、部屋の中を覗いた者があつた。

「嘘よく、ちやあんど靴が置いてあるわよ。」

からは云つたが、依然居ないとなると淋しかった。だが、かうした失望も長く続く事を要しなかつた。娘達は眼を鋭くして間もなく、青年が夕方から散歩に出掛ける事を山路で見付出した。其方が彼女達に取つては、却て都合が好い事の様に見える。お園婆さんに遠慮なく、彼女達は青年の後を追掛けて、其身邊近くへ迫る事さへ出来た。

青年は勇敢な女軍の進撃から免れる爲、獵人に狩立てられた獸の様に、奥へ々と山路を分け入らなければならなかつた。彼は馴れない坂路を漂浪した擧句、漸く女軍から完全に逃れ得る場所を發見した。其處は海中へ突出した絶壁の、中腹に當る小さな平地であつた。周圍は雑木の茂みに隠されて居るが、絶壁の裾は綿を敷詰めた様に浪で洗はれ、其處から藍瓶の様な海が限りなく擴がつて居た。彼の立つた場所は、平地と云つても岩だらけで、「自然」がいゝ加減に岩を起伏させたと云ふ丈けである。此等を支配する爲めである様に、中央に一つの大きな巖が碑の様に立つて居た。其邊どの岩でも、彼は勝手に腰を卸し、愛竹に托して好みの曲を奏し始めると、寺の縁先とは事變り、忽ち恍惚境に陶醉出来るのである。峰の松風は琴を奏で、彼の妙音に合せようとする。而してこれ等を妨げる鄙びた女子の聲はないのである。彼は夜毎に此遠い山路を分ける事を厭はなくなつた。

お園は裏の畠へ出て、手作りのトマトの實を採つて居た。一日々と木の葉が染まつて、秋も

次第に色濃くなつて居た。午下りの鋭い陽は、彼女の背に照り付けたが、裾を拂つて過ぎる風には心地よい冷かさがあつた。  
「小母さんく。後ろの方から彼女を呼掛ける聲がした。畠の畔路を傳つて、ぱた／＼と草履の音がする。

振向いて見るまでもない。駆け寄つて来るのは村の小町娘、お露と呼ぶ温良な娘である事は判つて居た。子供を持たない梵妻のお園は、此娘がまだ小さい時から可愛がつて、吾子の様に思つて居る娘である。お露の方も温順な子であるだけ、お園の事を小母さん／＼と云つて慕ひ寄つた。

お露とても、何時までも子供で居りはしなかつた。今では既う異性を戀ひ慕ふ年頃に達して居た。青年柳原の佛を一ト目見て以來、小さな胸は怪しく狂つた。他人がして居る青年の噂を聞く毎に、心は益々亂れて行つた。繭から絲を紬く時、何時しか手を止めて夢を追ふ様な氣になるのであつた。漁から歸る父を迎へに出て、果しの無い海を凝乎睜めて居る事が多くなつた。村の娘達の群に交つて、青年の隣部屋まで忍び寄つた一人でもあつた。併しお露が青年を戀ふ心こそ、本當に純な心であつたのである。彼女は心を籠めて餅を搗いたり團子を作つたりして、田舎者の手作りが如何なる不味いものであるかを考へる暇もなく、懇意な小母さんを通じて、此等を青年に齎さうとした。庭隅に植ゑた草花が咲いたと云つては、摘んで来て青年の机上に具へる事

を小母さんに頼んだ。彼女の心は純真であつたが、それは一度も青年の心に通じはしなかつた。梵妻の貪慾がさうさしたと云ふばかりではなかつた。お園は青年の心に戀の亂れを植をつける事を好まなかつた。

「あゝお露坊か。小母さんは振向かないのみか、手も止めないでかう云つた。よくそれでも毎日仕事に精が出るねえ。これぢや少しも早く、好いお婿さんを世話しなければやなんねえ。」

「いやよ小母さん。私お婿さんなど持ちはしないわよ。乙女は顔をぼつと赧らめて、かう云ひながら益々近寄つて來た。」

「ほんとにさうだ。それがいゝねえ。お婿さんだと一人よか持てないからねえ。あとの男は皆戀死しなければならなくなる。小母さんはわざと澄し切つて云つた。」

「小母さん、知らないわ。そんな事……」お露は甘つたれて一寸拗ねて見せた。而して今度は猶一層小母さんの顔へ近寄つて、聲を落して云ふのであつた。「だけど小母さん。貴女の所に居られる柳原さんねえ。此頃毎晩何處かへ出掛けなさるんでせう。一體何處へ行かれるんです。」

「私はそんな事が判るもんかね。」小母さんは不機嫌に云ふのであつた。「柳原さんの尻を追掛け廻して居るのは、あなたがたなんぢやないか。あなたたちこそ知つて居るだらう。」

「それが小母さんねえ。」お露は更に一段と聲を落し、而して次に云はんとする自分の言葉で、如何に小母さんが驚くかを恐れる様に云ひ出した。「あのう柳原さんねえ。毎晩あの涙石の所へ行か

れるんですよ。」

「えゝッ。あの涙石の所へ？ それや本當なの？」果して小母さんの驚きは非常であつた。お露は却て話出した事を、後悔する様な氣にさへなつた。「それは又何と云ふ事だらう。あんな恐ろしい所へなぞ行つて！」

二人は無言の裡に眼を見合した。恐怖と恐怖の眼であつたが、お互に恐怖の意味は違つて居た。

「だけどあんな。」お園は又云ひ出した。「それをどうしてあなたが知つてるの？ まさか其處まで見に行つた譯ぢやあるまいだらうに！」

乙女は驚いてどぎまぎした。どぎまぎせずには居られなかつた。柳原青年が娘子軍を逃れて、毎晩行つて笛に親んで居る所が、とりも直さず今二人が話して居る

涙石である。如何に好天氣が續いて居ても、涙石には二條の涙が流れて居る。夜に入ると岩はしくしく泣く。それは女の泣聲である。氣味の悪いのはそれだけではない。若し岩蔭に立寄つた人があれば、其人は大病を發して悶死する。さう云ふ傳説があるばかりではない。數多の實例さへ

擧げ得られることである。で、今日でも、里人は誰一人として此石へ近付かうとはしないのである。青年が娘子軍から完全に逃れたのも、かうした理由によるのである。

然るにお露丈は、眞心籠めて柳原青年を戀して居る。其戀人の身の上を案じ、昨夜青年の後



を尾けて、涙石の邊まで行つたのであつた。若し一緒に死なれるのであつたら、彼女に執つて此上もない悦びに相違ない。否々。

「私の爲だから死んで呉れ」と云ふ頼みでも、青年の口から云はれたものであれば、恐らく彼女は獨でも死んで行く事を厭はないであらう。然るに恐ろしい涙石まで慕つて行つても、青年と語り合ふ事すらゆるされない彼女である。戀しい青年を其必然の死から救ふ爲めにすら、其忠告を、小母さんに頼んで云つて貰はなくちやならない程、それ程かけ離れて居る第三者であつた。

「あなた涙石の所まで行つたんぢやない？」と、小母さんの追及は益々急である。お露は其鋭い語氣に壓された丈けでも、返事が容易に出なかつた。

「あなた行つたの？」小母さんは又繰返して訊いた。お露には最早隠し切れなくなつた。黙つて下向いたまゝ頷いて見せるのであつた。

「まあ。私はあきれた。何時頃行つたの。」

「柳原さんのすぐ後から。」

「何か見やしなかつた？」

「別に何にも……。」

「あなた病氣にでも成つたらどうするの。あたしやしらないよ。」小母さんはやゝ落着いて云つた。

「すみません。小母さん濟みません。もうあんな所へは行きませんから、どうか勘辨して下さい。お露はおろく、聲になり、眼からは大粒の涙が落ちた。だが、本心から自分が行つた事を後悔して居なかつた。依然案じて居るのは青年の身の上であつた。「小母さん。柳原さんに、あんな恐ろしい所へは既う行かない様に、あなたからさう云つて上げて下さい。あなたより外に、云つて上げられる人は誰も居ないんですから。」

「云つてあげてもいゝけれども、あなた第一そんな所へ行つちや駄目ぢやないか。」

「すみません。私もう行きはしまん。柳原さんが行かないやうにして下さい。」

「これからどんな事があつても行くんぢやないよ。一寸今から宅へお寄り、病氣にならない様にお呪ひをしてあげるから。」

かう云つてお寺へ連れて行つた。其翌朝は柳原青年のお給仕をしながら、お園は話を仕掛けるのであつた。

「あなた此頃の様に、散歩に行かれるのは結構ですが、涙石の所に行くのはおよしなさい。こんな事を申上げると、今時の若い方には笑はれるかも知れないが、あそこは恐ろしい所なんですよ。」

「どんな風に恐ろしい所なんです？ 私は毎晩行つて居るが、何もそんな風な事には出食はしませんよ。」柳原青年は暢氣に云ふのであつた。

「それぢや貴下が行かれた時、岩が泣いて居やしませんですか。」  
 「はつはつは……青年は珍らしく大きな聲で笑つた。「風の撥が、松の琴絲に觸れて唄ひますよ。」  
 餘りの暢氣さにお園は不満を感じた。少しは恐れさせようと云ふ積りで、出來得る限り實例を並べだした。

「そればかりではないんですよ。もう十年も前でせうか。此直ぐ下に居た八藏と云ふ若者も、それよりか今少し上の方に居た勘次と云ふ男も、それからずつと近頃ですけど、濱の方に居た作兵衛さんも、大層力自慢の男だつたもんですから、そんな馬鹿な事があるもんかつてねえ。夕方から一杯機嫌なんかで出掛けたんですよ。するとどうです。歸つて来たには來たんですが、其晩のうちに大病になつて、到頭死んで了つたさうですよ。又可哀想なのは熊吉と云ふ獵師でした。どうして途を間違へたか、ひよつこり涙石の所へ出たさうです。これはいけないと大急ぎで歸つたさうですが、やつぱり其晩大變な熱でねえ。到頭一週間程して死にましたよ。女では蔵取りに行つた船大工のお内儀さんと、も一人何とか云つた子も死んだんですよ。梵妻は青年の顔を覗き込んだ。」

「どうしてそんなに祟るんでせう。」  
 「何でも昔人浚ひに拐はかされたお姫様が、此處まで來た時病氣で歩けなくなつた相です。人浚

はそんな病人に用はないと云つて、彼處へ捨て、行つたさうです。處がお姫様には許嫁の夫があつたさうですよ。で其人が尋ねて來るまで何萬年でも待つんだと云つて、一番變りにくい石になつて了つたさうです。許嫁でない人が近寄ると、皆疑つて殺して了ふと云ふのです。」

お園は熱心に話したが、青年の心には何の感動も起らないのか、其儘起つて部屋へ行つて了つた。臆てお園は庫裡へ行つて、片付事などして居る所へ、慌しく駈込んだ者があつた。  
 「大變だ。私は今頼まれた使ひだけと、下のお露坊が大變だ。」若者は碌に口も利けなかつた。

「お露坊がどうしたと云ふの。」  
 「昨夜急に腹が痛み出して、一ト晩苦しんだ學句に、到頭今先刻息を引取つた。何でも一ト晩涙石の所へ行つたらしい。その祟だと自分でさう云つた。でもそんなに苦しむ抜いて居るのに『小母さん、』てねえ。あなたに頻りにあやまつて居たよ。それにねえ。『柳原さん。どうぞ涙石へ行つて下さいませ。あなたもこんなになるといけないから』と、息が絶えるまで云ひ續けてましたよ。」

「へえー。」と云つたきりお園は茫然となつた。と其儘お露の家へ駈け出した。狂人の様に泣き込むなり、お露の死體に抱きついて叫び出した。  
 「お、お露坊々々、私の大好きなお露坊は、どうしてこんな有様になつて呉れた。」

一座の人々の新しい涙まで唆つて、お園は泣ける丈け泣いた後、お露が昨日来て涙石へ行つた事を話したので、懇々其不心得を諭したが、その時はもう後の祭りであつたのかと、繰返し々々愚痴を零して居た。

此事が起つてから、島人は又涙石に對して、新たな恐怖心を起し出した事は云ふまでもない。それにしても不思議な事は、青年の身に何の祟りもなかつた事である。彼はお露が恐ろしい死方をした事も勿論聞いたらう。然るに臨終に云つて残して呉れた、優しい乙女の親切な言葉にも、一向耳傾けようとはしなかつた。お園の嚴重な監督さへあるのに、彼は其目を煙の様に潜り抜け、涙石を慕つて出掛けて行つた。しかし青年を注意して見ると、次第に體が衰弱して行く様であつた。

「あの男は笛の爲めに、今にも命を取られて了ふだらう。」

「否々、妖岩が彼の生血をじり／＼と吸つて居るんだ。」

こんな噂が島内に擴がつて居る時、青年は何も知らないらしく、涙石に行つては根限り笛を吹き鳴らして居るのであつた。しかし島人の豫言が遂に的中したらしい。或夜北風が烈しく吹き荒んだ時、青年は歸つてから病の床に就いてしまつた。親にも優るお園の看病を受けながらも、彼自身再び起つ事が出来ないと思つた時が來た。其時始めて彼自身の口から語られた物語と云ふのである。これは島人の長い間の謎を解いたものであつた。

それはかうである。

彼が涙石の蔭に來て始めて笛を吹き鳴らした時、峰の松は風を呼び起して琴の音を立て、足下の波は巖を叩いて鼓の音をなし、さながら彼の音楽に合奏した。曲目を追ふに従つて彼の心氣は氷を渡つた。彼の身は雲に跨つて塵外遙かに天上するやうに覺えた。而して知らず／＼息の限りを盡して吹いて居た。聴て吹き疲れて笛を置いたが、心は依然夢の世界を辿つて居た。餘韻は何時迄も耳に残つて居た。

「貴方。こんな所でお休みになつて被居ると、お風邪を召すかも知れませんが。目をお覺しなさい。而して今一度吹いてお聞かせ下さいな。若い美しい貴方様。貴方様の笛には神様のお力が籠つて居ますわ。きつとミエーズの神様の寵兒で被居るわ。」

青年はいつしか睡つて了つて居るらしい。かう云つて遠くの聲に起されて居た。それと判つて居りながらも、どうにも判然と自分自身に還る事が出来なかつた。

「ホ、ホ、... 餘程お疲れになつたと見えますねえ。氣持よさそうに眠つてゐらつしやるわ。」  
聲は次第に近付いた。起して居る人の姿さへ、彼には判然わかつて來た。それは繪にさへ未だ見た事の無い人で、雪の様な羅を軽く纏ひ、天女とでも云ふ可く美しい乙女であつた。天女は薄い光に包まれて、流れる様に進んで居た。彼の前へ來て立停つた。軟かい膨らみを持つた。香の高い温みさへ彼に迫つた。それでも猶目覺めない事も自分で知つて居た。乙女は口に袖を當て、

今一度聲に出して笑つたと思ふと、蠟細工の様な手を延べて彼の肩にかけた。

「今一度吹いてお聞かせ下さいました。」

かう聞えた時、青年の意識は徐々と現世に還り始めた。軽く軀を揺られて居ること、肩にかゝつた軟かな温み、それ等が段々判然感ぜられた。到頭夢から全く覺めて見ると、夢其儘の乙女は其處に居たのである。だが彼は少しも恐怖を感じないのみか、初めから引續いた親みを感じて居た。

「お起し申して済みませんでした。でも私は、何百年か貴下様をお待して居た事でせう。貴下様の尊い笛の音を！」

「貴女はどなたです。」

「今にお判りになりますわ。」

「さう被仰る貴女のお聲こそ、響妙なる音楽ではありませんか。未熟な私の笛などが、どうしてそれに及びませう。青年は怪しくも雄辯にこんな事を云つた。

「あらー どう致しませうお耻かしい。ミューズの神に恵まれて彼居る貴下様から、そんな謙遜のお言葉や、お世辭をお聞きすると云ふのは、何と云ふ恐れ多い事なんでせう。本當に本當に……私……。」

乙女は感激に満ちて云ふ事が出来ない様であつた。

「貴女はどう云ふ譯でこんな所へ來られたんです。」訊くまいと思つても訊かずに居られなかつた。

「それも今にお判りになりますわ。だけど、只、私は、……よしませう。貴下様を、高潔な方だとは思つて居ますわ。あのう、卑しい島の娘達に、どうぞお心を惹かれられない様に、そして、一筋に音楽の道をお辿りなさるやう、神様にお祈り申しますわ。」

青年の若い心は目覺めた。春の世界に辿り着いたのである。乙女の心も狂つて居やしまいか、なよ竹の様にふらふらに揺れたと見ると、春野に萌える絲遊の様に、乙女の息は青年の唇へ通つた。

「もうかうなつたら、貴下の笛を聞くことなしには、私は生きて居られませんわ。」やゝ久しく二人の言葉が絶えた後、乙女は彼に寄り添ひながら云つたのである。

「貴女にも亦死があるでせうか。」神かと疑つて青年はかう聞いた。

「あら、貴下は既う私を知つてお了ひになりましたのねえ。私本當にどうしませう……ア、お察しの通り私は此涙石の化身なんですの。」云ひ終つて瀧なす涙は乙女の頬を傳つて落ちた。

だが、青年は今では何とも思はなかつた。乙女の妖艶に魅せられたのである。彼とても乙女なしには一と晩も過さず事が出来なくなつた。其爲め今は氣衰へ肉瘦せて、最後の呼吸さへ迫つて居るが、少しも悔を残しては居ないと云ふのであつた。

これまで云つた時青年は疲れ切つて、うつらうつらと睡りに陥つて行くのであつた。再び彼が目覺した時、世は宛然に一變して居つた。森羅万象悉く、憤怒と悲哀に絶叫して居つた。ドド

ドと雨は地殻を破り、ゴゴと風は立つてるものを打つた。白刃を飛ばす電光を追ふて、雷霆は天空を引裂いた。また春でないのに奇體な現象ではないであらうか。其物妻に彼の睡は覺めた。梵妻は其枕下に小さく蹲まり、口にお經を唱へて居た。

「小母さん。長々お世話様になりました。もうこれでお別れです。……涙石は妊娠したさうです。許嫁の夫に申譯がないので、彼女は死なうけやならないんです。私も一緒に死にます。喜んで一緒に死ねるんです。死は幸福です。戀に結び付けられた死は幸です。小母さん左様なら。」病人の呼吸は逼つて來た。目るく顔色が無くなつて行く。ごつくり咽喉へ何か問えた様な音がした。

「あなたく、もし柳原さん。水を上げませう。水をお飲みなさい。水を水ですよ。はい水ですよ。」小母さんは茶碗に水を入れて、口の所へ持つて行つたり離したり、只まごまごして居つた。其後から住職も首を差延べて、青年の顔を覗き込んで居たが、さてどうすることも出来なかつた。

「子供丈けは！……子供丈けは！」

こんな言葉が、熱に壓されたやうに青年の口からもれた。瘦せ衰へた手を伸ばした。何ものかを捜し求めて居る様な様子であつた。小母さんは手を與へて握りしめた。それに返す丈けの力はもうなかつた。青年はそれきりで息を引取つた。嵐は一晚狂つて翌朝晴れた。何事も無かつた様に明るい春の景色であつた。

それから幾日か事なく過ぎた。が、誰云ふとはなしに島の中に噂が擴がつた。それは先日雷が落ちて涙石が二つに裂けたと云ふのであつた。

「石が裂けたら既う祟も無くなるだらう。これは島人一般の考へであつた。

が、岩の裂け目から若松が出て居る。と云ふ噂さへ持ち上つた。しかし一般の島民にとつて、涙石の事なんかはどうでもよかつた。これと結び付いて柳原青年の終焉の物語が傳つて居たが、それすら案外問題にはなりさうでなかつた。只島の巡査が一人小首を傾けて居た。而して巡査は遂に涙石の附近を取調べた。其結果として、物語の中心人物が引張られた事は云ふまでもない。梵妻々と云つて見ると、何だか小汚い梅干婆さんが想像されるかも知れないが、お園はそんな女ではなかつた。本當の歳は既う四十歳にもなつて居るかも知れないが、一寸化粧でもした時は、三十そこくに見えるあだつばい女であつた。しかも軀全體も見事に調つた美人であつた。

それは如林寺の住職の貧弱さに比べて、餘りに不釣合な妻女であつた。其女の櫛が涙石の岩の間から見出されたのであつた。お園は巡査にそれを突付けられて、始めて青年との關係を一切白状した。島民が涙石の傳説を恐れて近付かないのをいゝことにして、青年とそこで密會して居たのであつた。彼女に執つて、最も邪魔になるものは、彼女が最も愛して居たお露であつた。お露が青年に對する戀は、傳説をも恐れない程眞劍であつた。それはどうしても青年の心を動かさない

とも限らないものであつた。其お露が、傳説は信じて居りながら、自分の命を顧みず、只管青年の身を案じて、涙石まで行つたのである。彼女が密會して居た場所へ行つたと知つたのである。彼女は最早猶豫は出来ないと思ふに至つた。それにしても、彼女はお露を殺すのにも、傳説を利用する事を忘れなかつた。島民は易々と引かけられて、お露の死因を疑ふものは一人もなかつた。其時興へた毒薬は、薬學研究者であつた柳原青年が、調査したものである事は云ふまでもないが、事情を知つて彼女に與へたか否かは、彼女は一切白状しなかつた。青年が死に際して白状したと云ふ。彼が涙石へ通つた理由と云ふのは、勿論お園の作り事であるが、涙石が落雷の爲めに二つに裂けたのは事實である。裂目から小松が生へたのも嘘ではない。然らばどうしてお園はそれを知つたらう。それを知らずに、青年の最後の物語を作り上げる事は出来ないわけである。それは外でもない。青年の死はお園に取つては突然とも云ひ得るものであつた。彼女は密會の場所へ一枚の蓆を隠して置いてあつた。青年は死んで最早其用はなくなつた。それをいつまでも残して置いて、後の證據とならせたくなかつた。彼女は夜明方雷鳴の静まるのを待つて、蓆を取りに行つたのである。其時涙石の割れて居る事、其後に小松の生えて居る事を見た。而して青年が死に臨んで自白した言葉を作り上げたのであつた。ミュージズの寵兒、と、こんな事さへ知つて居た彼女であつたが、櫛丈は何時何處で落したか、巡査に突付けられるまで氣が付かなかつたのであつた。「完」

(長谷部製本)

昭和五年一月八日印刷  
昭和五年一月十日發行



日本探偵小説全集第十五篇

著者 山下利三郎

發行者 山本三生

印刷者 杉山愛二

東京市芝區愛宕下町四ノ四〇  
東京市牛込區市谷加賀町一ノ二

(刷印舎英秀社會式株)

發 兌

東京市芝區愛宕下町  
丁目四十番地

改 造 社

振替口座東京八四〇二番  
電話芝(43)自一一二一  
至一一二四番

第一卷  
第二卷  
第三卷  
第四卷  
第五卷

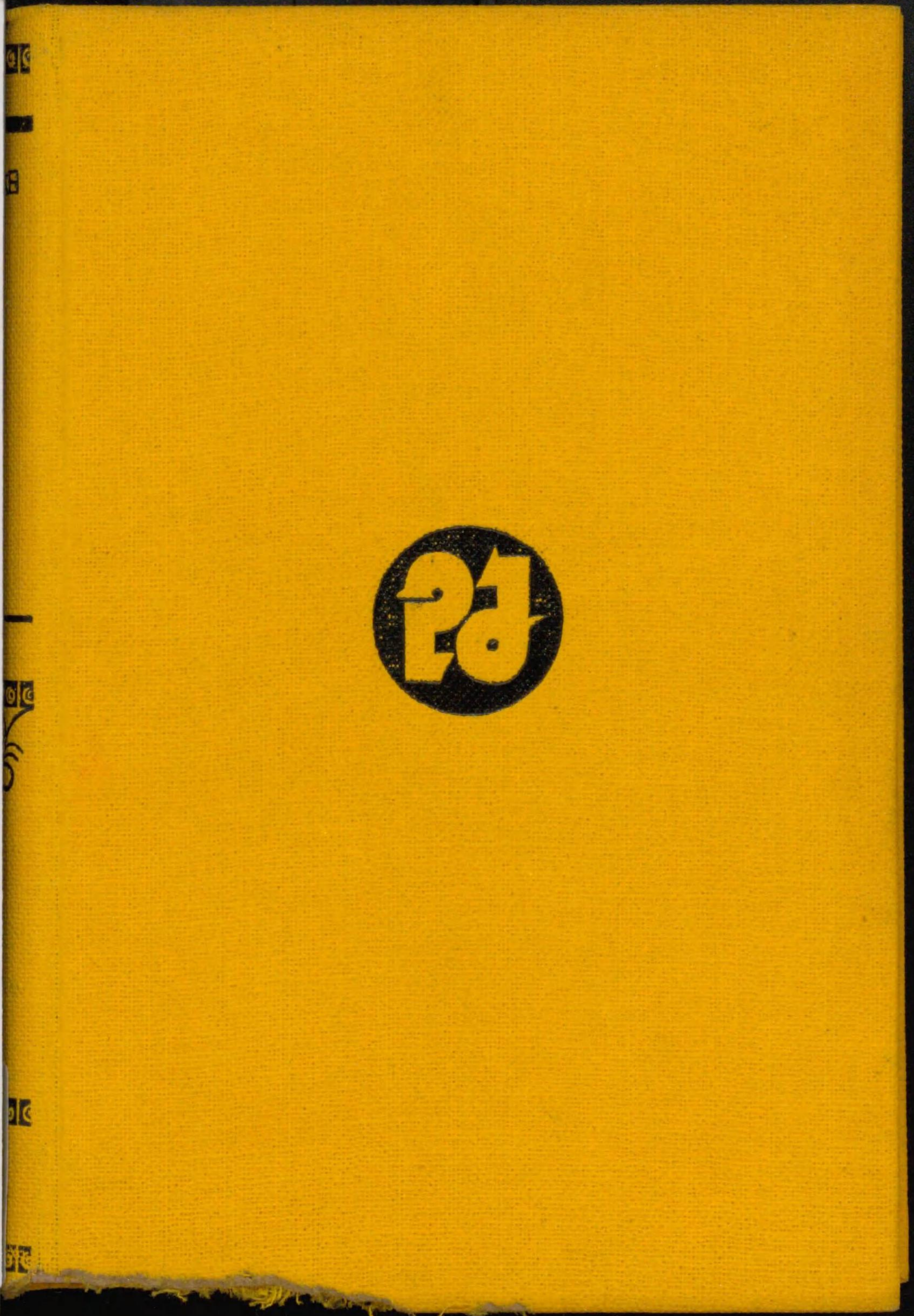
第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷
第二卷	第二卷	第二卷	第二卷	第二卷
第三卷	第三卷	第三卷	第三卷	第三卷
第四卷	第四卷	第四卷	第四卷	第四卷
第五卷	第五卷	第五卷	第五卷	第五卷
第六卷	第六卷	第六卷	第六卷	第六卷
第七卷	第七卷	第七卷	第七卷	第七卷
第八卷	第八卷	第八卷	第八卷	第八卷
第九卷	第九卷	第九卷	第九卷	第九卷
第十卷	第十卷	第十卷	第十卷	第十卷
第十一卷	第十一卷	第十一卷	第十一卷	第十一卷
第十二卷	第十二卷	第十二卷	第十二卷	第十二卷
第十三卷	第十三卷	第十三卷	第十三卷	第十三卷
第十四卷	第十四卷	第十四卷	第十四卷	第十四卷
第十五卷	第十五卷	第十五卷	第十五卷	第十五卷
第十六卷	第十六卷	第十六卷	第十六卷	第十六卷
第十七卷	第十七卷	第十七卷	第十七卷	第十七卷
第十八卷	第十八卷	第十八卷	第十八卷	第十八卷
第十九卷	第十九卷	第十九卷	第十九卷	第十九卷
第二十卷	第二十卷	第二十卷	第二十卷	第二十卷

卷一

第一卷





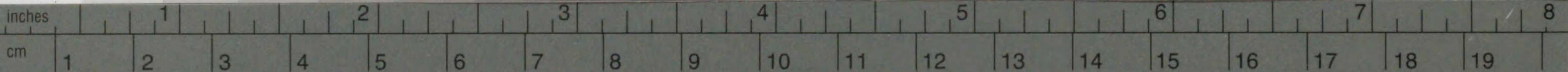


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

